

かき カキノヘタムシガについて



図1 成虫（体長約8mm）



図2 老熟幼虫（体長約10mm）

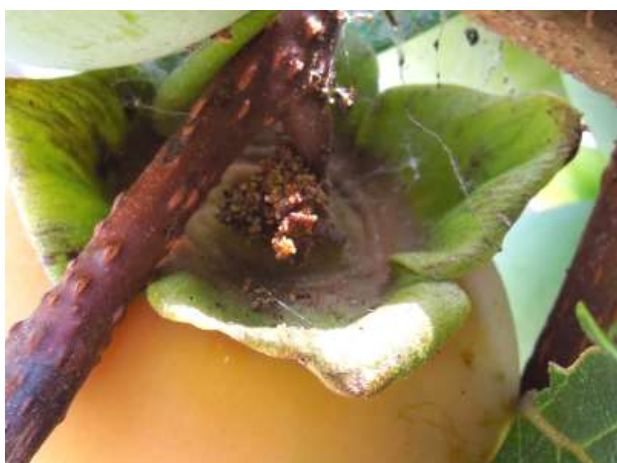


図3 果実への食入部



図4 第2世代幼虫による果実被害

1 生態

カキノヘタムシガ（別称：カキミガ、ヘタムシ）はカキのみを加害する。成虫は体長約8mmで黒褐色をしており、胸部背面に黄色斑点、前翅端部付近に黄色帯状斑がみられ、後脚には長毛が密生している。飛翔や交尾は夜明け前に活発に行われ、日中は葉裏に静止していることが多い。

成虫の発生は年2回、5月および7月にみられる。産卵は結果枝の先端5芽までに行われ、およそ1週間でふ化する。ふ化幼虫は数個の芽を転食し、3齢幼虫になると果実に入食する。食入部はヘタ付近が多く、その部位には虫糞の排出がみられる。第1世代幼虫は4～5個の果実を加害し、被害果は落果するか樹上で乾枯する。幼虫の期間は約30日で、老熟すると枝分岐部や粗皮下、乾枯した果実内などに繭をつくり蛹化し、約15日で成虫となる。第2世代幼虫は2～4個の果実を加害し、被害果は早期に着色し落果する。老熟した幼虫は剪定後の枝基部や樹皮、粗皮下などで繭をつくり越冬する。

2 発生状況

越冬世代成虫は5月上旬より発生し、5月下旬～6月上旬に発蛾最盛期がみられる。第1世代成虫は7月上旬より発生し、発蛾最盛期は7月下旬～8月上旬にみられる。春期が高温で推移すると成虫の発生時期が早くなるため、天候に注意する。なお、越冬世代成虫の発蛾最盛期は、富有の開花最盛期とよく一致するため、防除適期を判断する参考となる。

本虫はカキ単食性害虫のため、発生園から大きく移動することはない。このため、前世代の発生量が次世代に影響すると考えられる。

近年、成虫の発生期間が長期化する傾向である。特に発蛾最盛期までの期間が長引くと被害が拡大するため、注意が必要である。

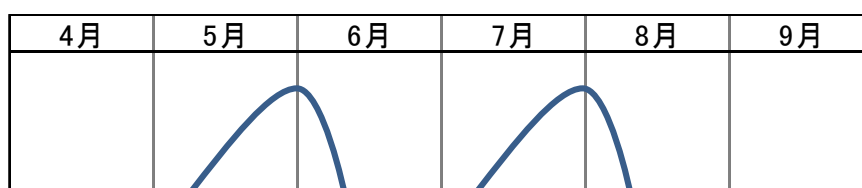


図5 カキノヘタムシガ成虫発生消長

3 防除対策

(1) 粗皮削りの徹底

越冬は、老熟幼虫が枝基部など樹皮下や粗皮下で繭をつくり行う。このため、冬期に粗皮削りを行うい越冬密度の低下を図る。この際、枝基部などの粗皮もていねいに取り除く。

(2) 薬剤による防除

防除適期は幼虫が芽を食害しているときであり、果実被害を確認してからの防除では難しい。第1世代幼虫は発蛾最盛期より7～14日後、第2世代幼虫は発蛾最盛期より3～10日後に防除を実施する。特に第2世代幼虫による被害は摘果が終了した時期であるため、影響が大きくなる。

発生が多く認められる園では、長期残効が期待できる薬剤を選択するか、1回目散布の7～10日後に追加防除を行う。

(3) 交信攪乱剤

交信攪乱剤を使用する場合は、越冬世代成虫の発生前から設置する。

(4) 被害果の除去

被害多発園では、被害果を除去し、埋設することにより、密度低下を図る。

(5) 放任園に注意

周辺に放任園があると、そこで発生した成虫が近隣の園へ飛来するため、注意する。